令和元年度　栃木市広島平和記念式典中学生派遣報告会（R1.8.29）

「派遣についての抱負・平和記念資料館の見学」　Ｄ班

・広島を訪れることへの抱負　福田匠（西方）

私たちは８月５日から７日の３日間、栃木市の代表として、７４年前に原爆が投下された広島の地を訪れました。戦争がもたらしたものを、実際に見たり聞いたりし、現地でしか学べないことを学ぶ機会をいただき、身の引き締まる思いでした。

出発式では、全員お揃いの帽子をかぶって記念写真を撮りました。この３日間で、どれだけ多くのことを学ぶことができるか、そして、栃木市や学校の代表として、自分の役目をしっかり務めることができるかという不安もありました。でも、見たり聞いたりした一つ一つのことから、しっかりと学び、仲間と力を合わせて頑張ろうと思いました。

そんな思いを胸に団員全員でバスに乗り込み、３日間の広島派遣がスタートしました。

・広島平和記念資料館について　川上涼太（藤岡第二）

広島平和記念資料館では、被爆者の遺品、被爆の悲惨な状況を写した写真や資料などが展示されています。また、広島の街の被爆前後の違いや核兵器などについて知ることができます。

広島平和記念資料館は１９５５年、昭和３０年に開館しました。そして２００６年、平成１８年に日本の重要文化財に指定されました。２０１４年からは、老朽化した建物の改修や展示物の整備が行われていました。また、時代のニーズに合わせて、タッチパネル式の大型情報検索装置を設置するなど、多くの人々に分かりやすく伝え続ける工夫がされていました。

始めに、東館２階の常設展示、広島の歩みを見ました。その後、本館では、８月６日の広島の写真や展示物を見ました。被爆しながらも、必死に生きようとしていた人々の姿が印象的でした。

・見学して心に残ったこと①　神戸悠良（東陽）

リニューアルした広島平和記念資料館は、被爆した方の写真や遺品、核を無くそうとする取組など、たくさんの展示品があります。

多くの展示品は、どれも戦争の恐ろしさ、悲惨さを物語っていました。特に心に残ったのは、「黒い雨」です。暑くて水が飲みたいけれど、飲んだら放射能で死ぬ。飲まなくても、火傷、放射能で死ぬ。「死」の一択しかないという状況はとても怖く、恐ろしいものだったと思います。

また、母親が子どもを抱きしめながら亡くなった絵も心に残っています。死の直前でも母親の愛が子どもを助けようとしている姿に胸をうたれました。けれど、火に囲まれ死んでし

まった、ということに心が痛みました。
　これからの未来を築く私たちが、戦争の恐ろしさや核の怖さ、唯一の被爆国であることを実感し、日本を最初で最後の被爆国にしなくてはいけないということを広めたいと思います。

・見学して心に残ったこと②　小平ことは（寺尾）
　私が広島平和記念資料館で心に残ったことは、放射線の怖さです。広島に投下された原子爆弾の特徴は、大量の放射線が放出されることです。人体が多量の放射線を受けると、細胞が破壊され、深刻な障害が引き起こされます。
　資料館には、「放射線による被害」というコーナーがありました。そこには放射線の説明や実際の写真が展示してありました。私が今でも心に残っているものは、多量の放射線を受けた人の顔に斑点が広がっている写真や、頭髪が抜けた姉弟の写真です。放射線の恐ろしさが写真から伝わってきて、すごく心が苦しくなりました。
　また、放射線以外にも、熱風などでボロボロになった服、火傷と負傷にあえぐ被爆者の写真、どれも見ていてつらくなりました。戦争は多くの人の命を奪う、絶対にあってはならないものだと強く感じました。資料館で見たもの、感じたことを、これから多くの人に伝えていきたいです。

・見学して学んだこと　慶野杏実（栃木西）
　広島平和記念資料館を見学して、私は「戦争の苦しさ」「生きていられることへの喜び」を実感しました。館内には、目をそむけたくなるような痛々しい展示物が並んでいました。原子爆弾は一瞬にして人々の命、築いてきたものを破壊しました。戦争中は、いつ命を狙われるか分からなかったり、物資が足りなかったり、人々はたくさんの「つらい思い」をしてきたのだと思います。私は、被爆者の訴えかけるようなまなざしに、心をうたれました。
　戦争という悲劇を、もう二度と繰り返さないために、私たちに何ができるでしょうか。戦争があった過去を知ること、そして、どのような未来を築きたいか考えることだと思います。広島の地に立って、たくさんのことを考えさせられました。また、色々なことを知り、学びました。時が経つにつれ、被爆者が亡くなり、戦争について語る人が少なくなってきています。私は、忘れてはならない過去をより多くの人に知ってほしいと思っています。